クインテット。ナイツ　L―対応する。ナイツ

恵／.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クインテット。ナイツ　Ｌ―対応する。ナイツ

【Ｎコード】
Ｎ３６７９ＢＡ

【作者名】
恵／．

【あらすじ】
私立証耶麻学園は、早くもテスト期間に突入しようとしている。そんな中「クインテット・ナイツ」のメンバーは、何故か紗佐に勉強を教えることに……。
混沌とした学園ドラマ（っぽいもの）、「クインテット。ナイツ」の第二話が今始まる。

夢から醒めて日常へ

声がする。泣き声だ。幼い誰かが、泣く声。
泣いているのは、少年だった。まだ五歳ほどの、小さな少年。
一人だった。傍らには誰もおらず、ただただ一人で、泣くだけだった。
泣き声が木霊して、辺りに響く。虚無に響く、泣き声。
それを打ち破る別の声が、聞こえてきた。
「どうか、しましたか？」
優しい、女性の声。少年は、顔を上げた。
「悲しいんですね」
少年は、頷いた。
「待ちましょう、一緒に」
声が、聞こえる。外側にではなく、内側に。少年の、心の中に。
「私の名前は———」

◇◇◇

「……何だ、夢か」
狼は、ゆっくりと体を起こした。
「よりによって、あいつと会ったときの夢とはな……」
狼は、ベッドから出ると、着替えを始めた。

◇◇◇

この日の放課後。
「さてと。今日の議題だが、これは次のテストに関することだ。まあ、平たく言うと、クラス全員のテスト勉強の面倒を見ろとのお達しだ」

狼は、溜息を吐きながら言った。
「面倒だね」
「面倒だな」
「ふん」
それぞれが、同じような感想を口にする。
「確かに面倒だがな、仕事なんだから仕方ないさ」
狼はそう言うと、書類の束を取り出した。
「とりあえず、クラス全員の入試成績を持ってきた。及第点の四十点を取れそうに無い奴をピックアップして、手分けして勉強を教えるんだ」
「馬鹿馬鹿しい……。大体、何故僕が馬鹿に勉強を教える必要がある？」
戸沢がいつもの、他者を見下したような目付きで、言い放った。
「そう言うな。とにかく、該当者を手分けして探してくれ」
狼は書類を五等分すると、それぞれに配った。
「こういう作業は苦手なんだけどなぁ……」
「右に同じく」
「口より手を動かせ」

学校の勉強なんか、社会に出てから何の役にも立たないのさ

◇

「大体終わったね」
縄文寺は、手元の書類を置いて言った。
「そのようだけど、残念ながら該当者はいないようだ」
戸沢が言う。その口ぶりからすると、いてほしかったのだろうか？
「皆、成績だけは立派なようで」
氷室、『だけ』は余計だ。
「ああ、そのようだな。ただ一人を除いては」
狼は、語尾を弱めながら言った。
「一人？　それって誰よ？」
氷室が、耳聡く聞き取って突っ込んだ。隣で焦っている人物にも気付かず。
「お前らが、よく、知っている奴だ」
今度は、『よく』の部分を執拗に強調して言う。
「誰さ？」
「もったいぶるのは感心しないな」
「俺らのよく知ってる奴って誰？」
狼と、『よく』知ってる奴以外の全員が、狼を問いただそうとした。
「そこでオロオロしている奴」
狼の指差す先には、顔を紅潮させながらオロオロしている紗佐がいた。
「「……」」
全員が言葉を失った。一人は羞恥のため、一人は呆れのため、一人は驚愕のため、一人は侮蔑のため、一人は納得のために。その沈黙を破ったのは、狼だった。

「理科と英語は二十点台。一番マシな国語と社会で四十点ぎりぎり。数学に至っては十点に満たない」
もっともそれは、紗佐にとっては単なる追い討ちであったが。
「よって議題を変更する。議題は『上沼に及第点を取らせるにはどうすればいいか』だ」
その言葉が、止めとなっているのだが……。

上沼紗佐の受難？

◇

「酷いね、これは」
「確かに」
「……」
彼此一時間ほど、皆で紗佐に勉強を教えていた。しかし、その成果は散々。化学を教えていた縄文寺、物理を教えていた氷室、数学を教えていた戸沢が、呆れ果てていた。
「うぅ……」
紗佐はただ、涙目で縮こまるのであった。
「まあ、英語のほうはなんとかなるっぽいから、数学、化学、物理をなんとかするか」
一方、英語を教えていた狼のみが、事態を楽観的に捉えていた。
「だったらあんたが教えなよ」
「無理だ」
狼は即答した。
「俺は英語以外は得意じゃない。ましてや、人になんか教えられるか」
「中学の数学のテストで満点取った奴が言うか」
「昔の話だ」
高一に昔も何もあるかと、そこにいる全員が思ったが、誰も突っ込まなかった。それよりも切実な問題が、今目の前にある。
「それはいいが、そろそろ下校時刻になる」
戸沢が、腕時計を見ながら言った。
「だな」
「だね」
「じゃあ、帰ろっか」

各々が鞄を持って席を立った。
「あ、あの……」
「じゃあね」
「また明日」
「そう言うことだ」
そして家路に着く。
「うぅ～……」
紗佐はただ、そして再び縮こまるのであった。

それぞれの事情

「そろそろ嘘だって気づけよ」
その声に、紗佐はハッと振り返る。
「というか、あんたもどうかと思うけど」
既に帰ったと思っていた面々が、まだ教室に残っていた。
「み、みんな……」
紗佐は、思わず喜びの声を上げた。何だかんだ言っても、手伝ってくれることが嬉しいのだ。
「とは言ったもの……」
狼は腕時計を見やると、
「時間は時間だしな」
どうしようもない現実を、告げた。
「どうしよっか」
「どうしようか」
「少なくとも、このまま学校に残るわけにはいかないな」
残りの三人は、それぞれ呟く。
「なら、誰かの家で続ければいい」
狼は、解決策を提示した。確かに悪くない案なのだが、そこまでして続行する意味があるのだろうか。明日、またすればいいだけなのでは？
「それなら誰の家にする？」
というナレーターの意見など、皆華麗にスルーだ。
「普通は、教えてもらう人の家に行くものだがな」
「いいねそれ。いいよね、紗佐ちゃん？」
氷室が、というか紗佐以外の全員が目線で、紗佐に問いかけた。
「あ、で、でも、私の家はかなり遠いですから……」
紗佐は、申し訳なさそうに断った。
「そんなに遠いの？」

「歩くと五十分は……」
確かに遠い。普段どうやって通学しているのだろうか。
「因みに俺ん家は無理。汚すぎて人が呼べないから」
氷室は、聞かれてもいないことに答えた。
「僕の家も無理だ。他人に荒らされたくない」
戸沢も答えた。何気に失礼な言い方ではあるが。
「あたしん家も。家中罠だらけで、ヘタすると死ぬよ」
縄文寺も、何気に恐ろしいことを織り交ぜて答えた。どうなってるんだ、お前の家は。
「となると、残ってるのは……」
全員が、狼のほうを向く。
「……、七時までだぞ」
狼は、渋々了承した。

お宅訪問　ＴＯ　向坂家？

◇

一行は、ぞろぞろと商店街を歩いていた。ここＹ市の商店街は、時代に似合わず繁盛している。昭和のような雰囲気が漂っているせいか、観光地になっていたりなかったり。

「どこまで連れて行くつもりだ？」

戸沢が、いかにも不機嫌そうに問うた。

「直ぐそこだ。そのくらい待て」

先導して歩いていた狼が、振り返らずに答える。

「この辺来たの久しぶりだね」

縄文寺が、辺りを見回していた。

「俺はこの辺来たことなんてないけどな」

対して氷室は、面白く無さそうに呟く。

「着いたぞ」

一行は、その一声で足を止める。そこは、居酒屋だった。暖簾は出ていないが、準備中なのだろう。店の名前は、戸に書かれている『虹化粧』と思われる。

「こんな所に住んでいるのか……？」

戸沢は、『なんだ、お前の家は酒場か？』とでも言いたそうに呟いた。

「居酒屋に住んじゃ悪いかよ」

「未成年者が、となるとな」

「関係ねえ」

狼は顔を背けてしまった。

「そんな事言ってるけどね、ここの女将さんは凄い美人なんだから。惚れても知らないよ」

縄文寺が、戸沢にそっと耳打ちする。
「ふん、くだらない」
戸沢は、そう言うのであった。

たまにいるよね。見た目外国人なのに、話す言葉が日本語で、しかもネイティブ

「帰ったぞクソババア」
狼は、店の戸を引いた。
「お帰りなさい。それと、いらっしゃい」
出迎えたのは、異国風の人物だった。茶色で艶のある長い髪、綺麗に澄んだ蒼い瞳、顔立ちも異国風だ。だが、どこかオリエンタルな感じもする。歳は二十代ほどだろうか。見た目の印象からは、女性のように思える。
「連れて来た」
「分かってます。皆さん、どうぞ入ってください」
その人物は、手招きをした。
「久しぶり、お優さん」
「お久しぶりです」
縄文寺は、軽く挨拶をして中に入る。
「……」
「んじゃ、お邪魔するか」
戸沢と氷室も中に入った。
「お、お邪魔します……」
「はい」
紗佐もそれに続く。
「それにしても、珍しいですね」
「何がだ？」
外に残っていた、狼が問うた。
「狼が、こんなにお友達を連れて来たことです」
優は、くすりと笑った。
「友達じゃねえよ」
「なら、何ですか？」
「決まってるだろ」

狼は中に入ると、
「仲間だ」
そう、言い切った。

向坂狼の受難？

◇

店の中は割と広い。ヒノキで造られており、カウンター席、テーブル席、座敷もある。窓も照明もないのに明るく、空調設備もないのに室温は快適に保たれていた。
「ゆっくりしていって下さいね」
優は、水が入ったグラスをそれぞれに配った。
「それにしても、うるっちにこんな美人の母ちゃんがいたなんてなぁ～」
羨ましいぜ、と氷室は言った。
「ちげえよ」
狼が、それを否定する。
「えっ……？」
「狼と私は、血が繋がっていないんです」
優が、それを引き継ぐ。
「狼の本当の両親は、この子が小さいときに行方知れずになってしまって、友人だった私が引き取ることになったんです」
「そうだったんだ……」
「目を見たら分かるだろ」
確かにそうだ。狼と優は、髪と瞳の色が明らかに違う。親子でないのは明白だ。
「でも、狼が愛しの我が子であることに変わりはありません」
そんな恥ずかしい台詞も、優は赤面せずに言ってのける。
「ですから、」
「だから、こんなにろくでもない奴になったのか」
戸沢が、いつもの侮蔑の声で呟いた。

「ちょっ、あんた、」
「だいたい、そうやって居酒屋なんかやってるから子供がろくでなしに育つんだ。自分の子じゃないから、仕事の片手間でも平気で育てて、それで子供がろくでなしになる。それをよくもまあ、自分がとても大切にしているように……」
「やめなって！」
縄文寺が、遮った。
「なんだい？　僕は事実を言っただけだ」
戸沢は、しれっと言い返した。
「もう、手遅れ、かな……？」
縄文寺は、優のほうを向いた。戸沢もつられてそのほうを見る。
「うっ、うううっ……」
優は、目に涙を溜めていた。というか泣いていた。
「う、狼……」
「げっ……」
狼は、名前の通り狼のような速さで逃げ出した。
「狼ーーーーーっ！」
だが、それよりも素早く、優が狼に飛びついた。
「うっ、うるふーーっ！　うるふーーーーっ！」
「は、離せ！」
狼は必死に抵抗するが、優がしっかり抱きついていて、逃れることが出来ない。むしろ、どんどん締め付けられている気がする。
「私は絶対！　狼の味方ですからねぇーーー！」
「離せぇーーーーー！」

開戦

「何あれ……？」
氷室が、二人を眺めながら呟いた。
「戸沢のせい」
縄文寺が答えた。
「何を言っている？　僕に一体何をしたと言うのだ？」
戸沢は、当たり前といった風に言い返した。
「だって、お優さんは狼のことを悪く言われると一番傷つくんだから。あの状態だと、三十分は収まらないと思うよ」
「ふん、情けない」
戸沢は、悪びれた様子もなく言った。
「いい大人が直ぐに泣くのは感心しないな。それじゃあ、まるで子供だ」
「分かってないね」
今度は縄文寺が、自信の篭った声で言った。
「誰かのために泣ける大人なんて、今時そうはいないよ。まあ、お優さんは度が過ぎてるけど。過剰な愛情表現かな……」
その言葉は、途中からしみじみとした声になっていた。
「さあ、勉強しに来たんだから、さっさと教科書出して」
「はぅっ！」
そしてここから、紗佐にとっての地獄が始まるのであった。

ここは地獄の一丁目

◇

縄文寺が、すらすらと問題を解いていく。
「ほら、次の問題も同じようにやってみて」
そして、笑顔で紗佐をほうを向いた。
「〜〜〜……」
しかし、紗佐は唸っていた。かれこれ、三十分はこうしている。
「駄目だな。これ以上やっても意味が無い」
戸沢が、諦めたように言った。
「諦めは禁物。多少は効率が悪くても、気長に見守るのも指導者としての役目」
「教師にでもなったつもりかい？」
「これからなる予定。ほら、続けるよ」
「うぅ〜〜〜……」
そして、勉強会は続いていく。

……数分後。

「ぜぇ……、ぜぇ……、ぜぇ……。勉強は……、進んでるか……？」
狼が、息を切らしながら歩いてきた。
「あ、狼。解放されたんだ」
「とんだ災難だったな、うるっち」
「まったくだ……」
狼は息を整えると、紗佐のほうをちらりと見やって……、

「全然、見たいだな……」
「はぅっ！」
少し泣かせる。
「だったら何とかしたら？」
「へいへい」
狼が、縄文寺と席を替わった。
「と言う訳で、みっちりいくぞ」
「ひっ！」
思わず後退ろうとする紗佐を、
「逃がさないから」
縄文寺が押さえつけた。
ここからは、地獄の第二幕だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3679ba/

クインテット。ナイツ　Ｌ一対応する。ナイツ

2012年1月14日17時52分発行